

研究課題

「混合歯列期に歯列弓拡大を行った症例における

大臼歯間幅径の長期的変化」

1. 研究の目的

矯正治療において、治療後の歯並びの安定性を考慮した治療目標の立案は非常に重要です。この治療目標に向かい様々な装置や手法を組み合わせる治療を進めていきます。矯正治療の手法の一つに歯列弓の幅を拡大する手法があります。しかしながら、拡大する基準は明確でないのが現状です。これまでの歯列弓の幅に関する研究は、矯正治療を行っていない児童の成長変化を明らかにしたものはあるものの、矯正治療により歯列弓の拡大を行った場合の安定性に関する研究はほとんどありません。本研究では、歯列弓の拡大を含む第Ⅰ期治療（永久歯と乳歯が混在する時期である混合歯列期の治療）を行った患者様について、歯列弓の変化を第Ⅱ期治療保定観察終了（永久歯の矯正治療がすべて終わった時期）まで縦断的に分析し、安定する歯列弓の幅について調査することと致しました。

2. 研究対象および方法

2004 年から 2005 年の間に大竹矯正歯科医院（長岡市）を受診し、先天異常や、先天性欠如歯や癒合歯等の歯の異常がない方で、下顎歯列弓の拡大を含む第Ⅰ期治療および非抜歯による第Ⅱ期治療と保定観察を行った患者様を対象とします。対象の患者様の研究用模型（噛み合わせの模型）を使用し、歯列弓の幅の変化を調査します。

本調査で用いる資料の利用に際しては、患者様が特定できないように管理し、かつ資料を用いて分析・評価した結果は、学会発表、学術雑誌等で公表することはありますが、その場合にも患者様の個人情報は一切明らかになることはありません。なお、結果は個人の数値ではなく対象者全体から得られた平均値などを用いるので個人としてのデータが公表されることはありません。

3. 臨床的意義

近年、抜歯を回避するために歯列弓の拡大を行うケースが多くなってまいりました。しかしながら、歯列の幅は歯が植わっている顎骨の幅に制限されるためどこまでも拡大できるというわけではありません。過度の拡大は矯正治療終了後の安定性だけでなく歯周組織にも影響を与える場合があります。本研究によって適切な歯列弓の幅の解明されることで、治療後の安定した咬合が獲得できる治療計画の立案が可能となると考えております。

本研究にご協力いただけない場合でも何ら不利益を被ることはありませんが、ご協力いただけない場合には下記連絡先にその旨をお知らせいただければ幸いです。さらに、一度同意していただいた場合であっても途中での撤回が可能です。その場合にも下記連絡先にお知らせください。

その他、本研究についてのご質問や疑問点などがございましたら、いつでもお気軽に下記宛にご相談ください。

新潟大学医歯学総合病院矯正歯科
TEL : 025-227-2960（外来診療室）
診療科長：齋藤 功
主任研究者：大竹 正紀
E-mail: otake@dent.niigata-u.ac.jp